

令和5年度学校教育自己診断 分析と課題

生徒

○分析

昨年度に引き続き肯定的な意見の割合が非常に高い結果となった。

アンケート28項目のうち、肯定的な意見の割合が90%以上の項目は12項目、80%以上の項目は21項目に及ぶ。70%を下回った項目は2項目であった。

枚岡樟風高校との機能統合が発表され、現在1年生の20期生が最後の学年となった中で、『生徒の喜ぶことをする』、『生徒に安全、安心な学びの場を提供する』、『かわち野でよかった!と感じて卒業を迎えさせる』ことを目標に、生徒との対話を大切にすること、生徒と教員が一緒になって様々な行事に取り組むことを実践してきた。「(設問5)学校は自分が努力したことを認めてくれる・・・91.3%」、「(設問6)先生は、生徒の話をよく聞いてくれる・・・93.5%」、「(設問9)生徒の意見を聞き、悩みや相談に親身になって応じてくれる(ようだ)・・・92.8%」、「(設問15)行事は楽しい・・・93.2%」、「(設問26)ほかの人と協力し合うことができる・・・91.7%」、「(設問28)学校の授業は充実しており、満足できる・・・84.9%」と肯定的割合が高いことから、生徒との対話を大切にしてきたことや協同して授業や行事に取り組んできたことが数字となって表れている。

昨年度、「(設問4)学校生活について、先生の指導は納得できる・・・66.2%」と例年と比較して高い肯定的割合ではあったものの、他と比較するとまだまだ改善の余地があると考えさせられた項目については、今年度、肯定的割合が79.6%と昨年度を大きく上回った。「よくあてはまる」とした回答が昨年度の25.4%から34.3%と上昇していることから、生徒の気持ちに寄りそった生徒指導ができたことがうかがえる。

昨年度、肯定的割合が前年度を下回った「(設問20)学校の図書館を利用したことがある」、および「(設問21)地域の方と交流する機会(老人ホームや保育園、幼稚園、地域フェス等)があった(ことを聞いた)」の2項目についても、肯定的割合がそれぞれ46.8%から62.2%、46.8%から52.4%と増えている。

○課題

本校がめざす学校像「夢や希望をかなえる学校」、「安全で安心な学校」の実現に近づいていると考えられる。令和6年度は新入生を迎えることはなく、2年生、3年生の2学年でのスタートとなる。特に現1年生は『先輩になる』という経験を味わうことができない。生徒たちに寂しい思いをさせないことを目標に加え、この高い肯定的割合を維持していかななくてはならない。そのためにも、行事のブラッシュアップや小規模だからできることをどんどんと実践し、また、外部講師を招聘して心の教育やこれまでに経験したことのない時間を経験させることで、学校生活を充実したものにすることが求められる。また、生徒指導の観点においても、同程度の水準に達するよう、今後も対話を中心に据え、指導をされる前に自らで気づき、襟もとをただすことができる、TPOをわきまえることができる人材の育成をしていくことが求められる。

保護者

○分析

「(設問2) 子どもは、学校の授業がわかりやすく楽しいと言っている・・・55.0%」を除き、すべてのアンケート項目で肯定的割合が 60%を上回り、昨年度なみの肯定的割合であった。特に「(設問13)この学校の授業参観や学校行事に参加したことがある・・・65.0%」は、過去5年間でもっとも高い肯定的割合となっている。

○課題

生徒と保護者の「わかりやすい授業」に関するアンケートについて肯定的割合のずれが大きかった。生徒が家庭で授業について「わからない」ということを中心に会話していることや、子どもの学力が期待通りに伸びていないと感じていること、教員の保護者に対する情報発信量が不足していることなどが考えられる。学校行事に参加してくれる保護者の割合は増えてきているが、それは体育祭や文化祭という行事への参加者が増加したものであり、授業参観の参加者数が増加したわけではない。学校生活の基盤となる「授業」をこれまで以上に保護者に知ってもらうことを意識し、学校と保護者が生徒の学力向上のため、協力できる環境を整備しなくてはならない。

教職員

○分析

「(設問4) 学校の教育課程について、教職員で話し合うことがある・・・61.9%」と「(設問5) 生徒の学力向上のため、学校全体で取り組みを行っている・・・66.7%」を除いたアンケート項目で肯定的割合が増加し、否定的割合が減少した。特に「(設問9) いじめ(疑いを含む)が起こった際の体制が整っており、迅速に対応することができる」では肯定的割合が100%であった。人権や教育支援に関わるアンケート項目でも肯定的割合が20%以上増加し、学習指導、生活指導の変容がうかがえる結果となった。肯定的割合が90%以上の項目は8項目、80%以上の項目は12項目に及ぶ。一方で、肯定的割合が80%を下回った項目は、分析で触れた(設問4)と(設問5)、および「(設問13) 特別活動、学校行事等が生徒の育成につながるよう工夫、運営されている・・・76.2%」の3項目であった。機能統合で教員数が減少する中、教員全体が一つのチームとして行動することが求められた1年であった。目の前にある事象一つひとつにアセスメントを行い、課題解決していくことができたことが肯定的割合の上昇につながったと同時に、限られた時間の中で、物事に優先順位を付けていくとき、教育課程についての議論などがどうしても後回しになってしまったことや、マンパワーに依存してしまう場面が見受けられたことなどが、肯定的割合の上昇につながらなかった要因と考えられる。

○課題

令和6年度は2学年体制となり、これまで以上に教員数が減少する。業務精選も一定終了し、これ以上業務を減らすことが難しい。そんな中、肯定的割合をさらに上昇させることは困難である。いかに現状維持できるかを考え、これまで以上に円滑に業務が遂行できるよう、教職員全員が意識しなくてはならない。